



CHOPIN  
MAZURKAS  
MASAKO EZAKI



SUPER AUDIO CD



# ショパン

FRÉDÉRIC FRANÇOIS CHOPIN (1810-1849)

## DISC 1

### マズルカ集 I

Mazurkas I

#### 4つのマズルカ 作品6

4 Mazurkas Op.6

- |   |  |      |
|---|--|------|
| 1 | 第1番 嬰へ短調 作品6-1<br>No.1 in F-sharp minor Op.6-1 | 3:18 |
| 2 | 第2番 嬰ハ短調 作品6-2<br>No.2 in C-sharp minor Op.6-2 | 2:39 |
| 3 | 第3番 ホ長調 作品6-3<br>No.3 in E major Op.6-3        | 1:49 |
| 4 | 第4番 変ホ短調 作品6-4<br>No.4 in E-flat minor Op.6-4  | 0:54 |

#### 5つのマズルカ 作品7

5 Mazurkas Op.7

- |   |   |      |
|---|---|------|
| 5 | 第5番 変ロ長調 作品7-1<br>No.5 in B-flat major Op.7-1 | 2:19 |
| 6 | 第6番 イ短調 作品7-2<br>No.6 in A minor Op.7-2       | 4:39 |
| 7 | 第7番 へ短調 作品7-3<br>No.7 in F minor Op.7-3       | 2:22 |
| 8 | 第8番 変イ長調 作品7-4<br>No.8 in A-flat major Op.7-4 | 1:14 |
| 9 | 第9番 ハ長調 作品7-5<br>No.9 in C major Op.7-5       | 0:46 |

#### 4つのマズルカ 作品17

4 Mazurkas Op.17

- |    |   |      |
|----|---|------|
| 10 | 第10番 変ロ長調 作品17-1<br>No.10 in B-flat major Op.17-1 | 2:30 |
| 11 | 第11番 ホ短調 作品17-2<br>No.11 in E minor Op.17-2       | 2:08 |
| 12 | 第12番 変イ長調 作品17-3<br>No.12 in A-flat major Op.17-3 | 4:50 |
| 13 | 第13番 イ短調 作品17-4<br>No.13 in A minor Op.17-4       | 4:29 |

#### 4つのマズルカ 作品24

4 Mazurkas Op.24

- |    |   |      |
|----|---|------|
| 14 | 第14番 ト短調 作品24-1<br>No.14 in G minor Op.24-1       | 2:57 |
| 15 | 第15番 ハ長調 作品24-2<br>No.15 in C major Op.24-2       | 2:02 |
| 16 | 第16番 変イ長調 作品24-3<br>No.16 in A-flat major Op.24-3 | 1:56 |
| 17 | 第17番 変ロ短調 作品24-4<br>No.17 in B-flat minor Op.24-4 | 4:40 |

#### 4つのマズルカ 作品30

4 Mazurkas Op.30

- |    |  |      |
|----|--|------|
| 18 | 第18番 ハ短調 作品30-1<br>No.18 in C minor Op.30-1        | 1:48 |
| 19 | 第19番 ロ短調 作品30-2<br>No.19 in B minor Op.30-2        | 1:18 |
| 20 | 第20番 変ニ長調 作品30-3<br>No.20 in D-flat major Op.30-3  | 2:47 |
| 21 | 第21番 嬰ハ短調 作品30-4<br>No.21 in C-sharp minor Op.30-4 | 3:45 |

#### 4つのマズルカ 作品33

4 Mazurkas Op.33

- |    |  |      |
|----|--|------|
| 22 | 第22番 嬰ト短調 作品33-1<br>No.22 in G-sharp minor Op.33-1 | 1:51 |
| 23 | 第23番 ニ長調 作品33-2<br>No.23 in D major Op.33-2        | 2:24 |
| 24 | 第24番 ハ長調 作品33-3<br>No.24 in C major Op.33-3        | 1:57 |
| 25 | 第25番 ロ短調 作品33-4<br>No.25 in B minor Op.33-4        | 5:19 |

## 4つのマズルカ 作品41

4 Mazurkas Op.41

- |    |                                |      |
|----|--------------------------------|------|
| 26 | 第26番 ホ短調 作品41-1                |      |
|    | No.26 in E minor Op.41-1       | 2:12 |
| 27 | 第27番 ロ長調 作品41-2                |      |
|    | No.27 in B major Op.41-2       | 1:22 |
| 28 | 第28番 変イ長調 作品41-3               |      |
|    | No.28 in A-flat major Op.41-3  | 2:01 |
| 29 | 第29番 嬰ハ短調 作品41-4               |      |
|    | No.29 in C-sharp minor Op.41-4 | 3:27 |

## DISC 2

### マズルカ集 II

Mazurkas II

### 3つのマズルカ 作品50

3 Mazurkas Op.50

- |   |                                |      |
|---|--------------------------------|------|
| 1 | 第30番 ト長調 作品50-1                |      |
|   | No.30 in G major Op.50-1       | 2:33 |
| 2 | 第31番 変イ長調 作品50-2               |      |
|   | No.31 in A-flat major Op.50-2  | 3:09 |
| 3 | 第32番 嬰ハ短調 作品50-3               |      |
|   | No.32 in C-sharp minor Op.50-3 | 4:59 |

### 3つのマズルカ 作品56

3 Mazurkas Op.56

- |   |                          |      |
|---|--------------------------|------|
| 4 | 第33番 ロ長調 作品56-1          |      |
|   | No.33 in B major Op.56-1 | 4:48 |
| 5 | 第34番 ハ長調 作品56-2          |      |
|   | No.34 in C major Op.56-2 | 1:49 |
| 6 | 第35番 ハ短調 作品56-3          |      |
|   | No.35 in C minor Op.56-3 | 6:00 |

### 3つのマズルカ 作品59

3 Mazurkas Op.59

- |   |                                |      |
|---|--------------------------------|------|
| 7 | 第36番 イ短調 作品59-1                |      |
|   | No.36 in A minor Op.59-1       | 3:45 |
| 8 | 第37番 変イ長調 作品59-2               |      |
|   | No.37 in A-flat major Op.59-2  | 2:36 |
| 9 | 第38番 嬰ヘ短調 作品59-3               |      |
|   | No.38 in F-sharp minor Op.59-3 | 3:23 |

### 3つのマズルカ 作品63

3 Mazurkas Op.63

- |    |  |      |
|----|--|------|
| 10 | 第39番 口長調 作品63-1<br>No.39 in B major Op.63-1        | 2:13 |
| 11 | 第40番 へ短調 作品63-2<br>No.40 in F minor Op.63-2        | 1:43 |
| 12 | 第41番 嬰ハ短調 作品63-3<br>No.41 in C-sharp minor Op.63-3 | 2:07 |
| 13 | 第42番 イ短調<br>No.42 in A minor "A Emile Gaillard"    | 3:09 |
| 14 | 第43番 イ短調<br>No.43 in A minor "Notre temps No.2"    | 3:36 |

### 4つのマズルカ 作品67

4 Mazurkas Op.67

- |    |  |      |
|----|--|------|
| 15 | 第44番 ト長調 作品67-1 (遺作)<br>No.44 in G major Op.67-1 (Op.posth.) | 1:14 |
| 16 | 第45番 ト短調 作品67-2 (遺作)<br>No.45 in G minor Op.67-2 (Op.posth.) | 1:53 |
| 17 | 第46番 ハ長調 作品67-3 (遺作)<br>No.46 in C major Op.67-3 (Op.posth.) | 1:31 |
| 18 | 第47番 イ短調 作品67-4 (遺作)<br>No.47 in A minor Op.67-4 (Op.posth.) | 2:51 |

### 4つのマズルカ 作品68

4 Mazurkas Op.68

- |    |  |      |
|----|--|------|
| 19 | 第48番 ハ長調 作品68-1 (遺作)<br>No.48 in C major Op.68-1 (Op.posth.) | 1:38 |
| 20 | 第49番 イ短調 作品68-2 (遺作)<br>No.49 in A minor Op.68-2 (Op.posth.) | 3:10 |
| 21 | 第50番 へ長調 作品68-3 (遺作)<br>No.50 in F major Op.68-3 (Op.posth.) | 1:20 |
| 22 | 第51番 へ短調 作品68-4 (遺作)<br>No.51 in F minor Op.68-4 (Op.posth.) | 2:37 |
| 23 | 第52番 変口長調<br>No.52 in B-flat major                           | 1:25 |
| 24 | 第53番 ト長調<br>No.53 in G major                                 | 1:35 |
| 25 | 第55番 二長調 (遺作)<br>No.55 in D major (Op.posth.)                | 1:31 |
| 26 | 第56番 変口長調 (遺作)<br>No.56 in B-flat major (Op.posth.)          | 1:05 |
| 27 | 第57番 ハ長調 (遺作)<br>No.57 in C major (Op.posth.)                | 3:01 |
| 28 | 第58番 変イ長調 (遺作)<br>No.58 in A-flat major (Op.posth.)          | 1:38 |

### 江崎 昌子 (ピアノ)

MASAKO EZAKI (piano)

2006年3月28-30日 富山・北アルプス文化センターにて収録

Recording Date : 28-30 Mar. 2006

Recording Location : Northern Alpine Culture Center, Toyama

Mixed and Mastered at EXTON Studio, Yokohama

TOTAL TIME : DISC 1 75:59 DISC 2 72:33



## 解説

真嶋 雄大

ショパンは、マズルカに何を求めたのだろうか。そしていったい何を封じ込めようとしたのだろうか。確かに「バラード」、「スケルツォ」、そして「ノクターン」など、ショパンが新たな生命を吹き込んだジャンルは他にもあるが、これほど生涯を通してこだわった曲種はない。ポロネーズがその風趣から宮廷や貴族に愛されたのに対し、マズルカは市民の間で流行した。さらにマズルカはポーランド語のアクセントと密接な関係がある。故郷ポーランドを離れ、ついに帰ることの叶わなかったショパンが、日々の心境を自国の言葉でマズルカに留めたとして何ら不思議はない。

ショパンの人生を辿ると、そこに見えるのはただ哀しみしかない。もちろん音楽家としての成功も、ロマンスも多々あった。けれども振り返ると、その全てが哀しみに彩られているのである。江崎昌子がポーランドに渡る決心をしたのは、中学生のとき聴いたマズルカの衝撃だった。それが彼女をポーランドに駆り立てたのなら、すでにその頃彼女はショパンの本質を見抜いていたことになる。なぜなら健康に対する不安、周囲との軋轢、理想との葛藤、美に対する憧憬、そして自らの内面に忠実でありたいと願う焦燥など、ショパンの哀しみのすべてが、このマズルカには込められているからである。

ポーランドの風土に触れた江崎は、それからショパンの足跡を辿るように追った。言語、習俗、ポーランドの人々と民族の精神性、他国には永遠に理解できない微妙で木目細かいニュアンスを直接肌で感じた。そしてショパンの「マズルカ」に潜む真実を得た。だからこそ彼女のマズルカには徒ならぬ説得力が宿る。明晰な分析力と丹念なアプローチ、情景描写と転換の見事さ、細

部にまで行き届くデリケートな抒情と確固たる構成観、何より心の奥底からの共感と情熱は、他には決してない生命力溢れる躍動感となって彼女の演奏を彩るのである。

さらに彼女ならではの解釈もまた興味深い。例えばマズルカ「ハ長調Op.7-5」である。僅か1分にも満たない短い作品であるが、冒頭左手による印象的なG音のオクターブから始まり、主部を繰り返して唐突に終わる。しかし江崎は熟慮を重ね、主部の繰り返しをもう1回増やし、さらに冒頭のオクターブ部分を付け加えている。またショパンの絶筆となった「ヘ短調Op.68-4」でも、同様の工夫を凝らしている。これは単純な演奏効果を狙ったものでは決してない。実際に江崎がマズルカの衣装を身に着けて舞踊を学び、その感覚から得た確信と、同時にショパンの人生と自らを重ねることによって生れた新たな心象風景なのである。

ショパンに対する江崎の想い、その全身全霊をかけて結実したのがこのアルバムだ。ややもすると軽く見られがちなマズルカではあるが、実際はマズルカこそがショパンの魂である。そのマズルカを全集としてまとめたのは、世界的にもあまり例のないことではないか。

一地方の民族舞曲であったマズルカをショパンが芸術の高みにまで昇華したように、このアルバムはマズルカに改めて真正面から向き合い、その真実と生命を吹き込んだ、江崎昌子のタペストリーにほかならない。

(まじま・ゆうだい)

## 曲目解説

江崎 昌子

“ポーランド”という国の名を耳にした時、ショパン以外にどんなことを想像されることでしょう。きっと多くの人が歴史の重圧に押しつぶされてきた悲劇の国…と思うのではないのでしょうか。私は6年間のポーランド生活の中で、ショパンの時代以前から、また第二次世界大戦を経て、現在に至るまでのポーランドの歩んだ歴史を目の当たりにして、ポーランドが受けた侵略、被害、屈辱の大きさを遥かに超える、その中で“守りぬかれたもの”に感銘を受けました。それはポーランド人としての精神、魂、文化、そして音楽が時代を超えて、その辛辣な歴史の賜物として今、こうして息づいているからです。

“ショパンの音楽は、花々に隠された大砲である”これは、シューマンの有名な言葉ですが、私はショパンの作品の中でも特に、マズルカの作品の数々に、この意味を強く感じます。ショパンはワルツやポロネーズ、マズルカを合わせると100曲近い舞曲を書きましたが、その大半を占めるマズルカはやはり彼の言葉そのものであったでしょう。そのおびただしい数のマズルカのほとんどが、ポーランドを離れてから作られていること…そこには、ショパンにそうさせた何かがあったはずです。

ショパンの時代に地図上でポーランドが存在しなかったこと、当時の状況からショパンがリハビリに命を賭さざるを得なかったことによる、その望郷の念の強さとポーランド人としての意識の強さは否応にも作品に反映されていきました。シューマンの言う、大砲とは不安や嘆き、深い哀しみ、怒り、絶望、または凜とした強い意志なのでしょう。“花々に隠されたショパンの心情”がひしひしと書きつづられた手紙、そして日記のような、最も個人的なメッセージがマズルカには存在するのです。

ポーランドの詩人、ノルヴィットが“ショパンは野原に落とした農民

の涙をダイヤモンドに変えた”と述べているように、ショパンは、単なる土着の踊りであったマズルカに独自の様々な心情と独創性を込めて、崇高たる芸術へと発展させポーランド魂を世界に示しました。ショパンのマズルカは踊りのために書かれたものではなく、踊りから生まれたものです。元来、マズルカという踊りには、マズル(快活なリズムで付点を含むことが多く、一般的には2小節単位)、クヤヴィアク(長いフレーズで、豊かな歌が大きな特徴。テンポはゆるやかなものが多いが、中には速いものもある。リズムは多様)、オベレク(最も速いテンポで回転しながら踊られ、リズムも同じ形を連ねることが多い)の3つの踊りに大別され、ショパンは1曲のマズルカの中にその3つを混ぜ合わせながら、それぞれの特徴を生かして新しいマズルカの形を作りました。マズルカのリズムには3拍目にアクセントがくることが多く、特にこのリズムはショパンの心情そのものから生まれるものだと思います。



リズムは多様でこれは一例に過ぎない。

私はマズルカを演奏する際に、そのリズムを心のどの部分に置くかを考えながら弾くようにしています。伝統的なフォークロールそのもので踊りが目に浮かぶようなマズルカ、(作品6-3や作品7-1、作品17-1、作品33-2、作品41-2、作品56-2、作品67-1、作品68-1)などはマズルカのリズムが最も明快に表れているものです。ショパンが故郷であるマゾフシェ地方をポケットに入れてそのまま再現したかのような作品です。一方、作品41-4や作品50-3、作品59-3などに見られる絶望の叫びや怒りを感じる悲劇的な作品ではこのリズムに込められるエネルギーの底知れない力強さがあります。またショパンが幾度となく涙した、最も哀しい望郷の念は、すずりなくような、心の奥底にしまいこんだマズルカのリズムともいうのでしょうか(作品30-1や作品41-1、作品56-3や作品63-3、作品68-4など)。

ポーランドにはクリスマスキャロルや民謡にマズルカが使われていることがとても多く、ポーランドの国歌もそのひとつです。マズルのリズムで“我々が生きている限り、ポーランドは滅びない”という歌詞で始まります。ポーランドの人々が歴史を通して守りぬいたもの…ショパンのマズルカにこそ、その思いが貫かれていると思います。

※上記作品41の番号は自筆譜の順序による。

#### 4つのマズルカ 作品6

1830-31作曲 32年出版。一番初めの生徒、パウリーナ・ブラーテル伯爵令嬢に献呈。

##### 第1番 嬰へ短調 Op.6-1

ポーランドのフォークロールの影響がとても強い作品。テーマのはじまりはメロディーが上昇し、後半は悲嘆するような半音階で下降していく。特にクヴァヴィアクの旋律に頻繁に現れる第4音を半音上げたり(リディア旋法)、また戻したりを繰り返す方法が、ここでは多く使われている(第5小節目や第17、18小節目など)。ま

た、*ff*で奏でられるリズムカルな部分は、マズルカで男性が「へい」と力強く掛け声をかけ、きびきびした動きで踊る場面のような。

##### 第2番 嬰へ短調 Op.6-2

ためらうように静かなクヴァヴィアクで曲が始まり、マズルの踊りが毎回少しずつ表現を変えながら何度も繰り返される。第1曲目にあった第4音の変化がここでも第19、20小節に現れる。中間部はGajo(ガヨ、陽気)と示され、ほんの束の間晴れやかになるが、そのまま冒頭のクヴァヴィアクにおさまり、元に戻る様子は印象的で哀愁に満ちている。

##### 第3番 ホ長調 Op.6-3

始まりは空虚さのみが、連続して不規則な位置のアクセントで奏でられ、楽しいマズルカへの予感がかきたえられる(このアクセントは作品68-3の中間部や作品24-2の53小節目からのアクセントの位置などにも共通していて、オベレクの導入などでよく現れる)。回転や跳躍、足踏みなどめぐるしく動く威勢の良い華やかなマズル。ここでも第4音の変化が41小節目から現れる。

##### 第4番 変ホ短調 Op.6-4

わずか24小節の作品ながら、オベレクの軽やかで速いテンポによって典型的なポーランドの田舎の空気が流れ、どこかわびしい、そしてとても優しい雰囲気にも満ちている。

#### 5つのマズルカ 作品7

1830-31作曲 32年出版。ニューオリンズのポーランド人の血をひくピアニスト、ポール・ジョーンズ氏に献呈。

##### 第5番 変口長調 Op.7-1

活発で軽やかな足踏みが聞こえるような典型的なポーランドのフォークロールを思わせる作品。中間部は謎めいたツイガース風の雰囲気か不協和音によってかもし出されて、リディア旋法による音の扱いが民族的で独特。

##### 第6番 イ短調 Op.7-2

素朴で気どらない直直な気持ちに、悲観的であまのじゃくなも



うひとつの感情が突然顔を出すような、どこか不安を帯びた不思議な作品。

#### 第7番 へ短調 Op.7-3

8小節にわたる左手のみの前奏は、低音5度の響きの中であらゆる、何かを秘めた意味あがりな笑みを浮かべているかのよう。その後、陰鬱なクァヴィアクがあらわれ左手の広いアルペジオが独特の雰囲気をかもし出している。途中オペレクがあらわれテンポが速めになり、エネルギーに満ちた、リズムカルなマズルカが登場する。

#### 第8番 変イ長調 Op.7-4

オペレクの回転が目に浮かぶような陽気な作品。33小節目からの4小節は踊りをやめて、耳を澄まし、遠くの鐘でも聞いているかのよう。ポーランドの典型的なフォークロール。

#### 第9番 八長調 Op.7-5

マズルカ集の中で最も短い作品。民族楽器を奏でる村人達が陽気に同じメロディーを繰り返し奏でる様子。オペレクのリズムにのり、senza Fine(終わりが無い)と書かれているように何度も繰り返すことができる、ユーモアいっぱいマズルカ。ここでは3回繰り返し、遠くから楽隊と数人の男女がオペレクを踊りながら徐々に近づき、そして遠ざかっていくように、ppから始めて大きなcresc.そして緩やかにdim.を作り最後に冒頭の4小節を付け足して演奏している。

#### 4つのマズルカ 作品17

1832-33作曲 34年出版。歌手、リナ・フレッツ夫人に献呈。

#### 第10番 変ロ長調 Op.17-1

この作品番号の中で唯一、明るく晴れやかな雰囲気を持つ。誇りと自信に満ちた歓喜のマズル。中間部は美しい女の子のソロの踊りのよう。

#### 第11番 ホ短調 Op.17-2

哀愁のクァヴィアク。旋律も和声も様々な陰影を持ち、その繊

細な移り変わりが微妙な不協和音と交り合い、大変美しい作品。

#### 第12番 変イ長調 Op.17-3

独特の和声とメランコリックな佇まいが印象的な作品。どこかにやるせない気持ちもたずさえて、16小節目からの変ロ短調の部分は心の叫びにも聞こえる。

#### 第13番 イ短調 Op.17-4

果てしない悲しさと、ミステリアスで瞑想的なマズルカ。このマズルカについて、このような逸話がある。

ユダヤ人たちのバーの入り口のドアの前で、一人の男の子が悲しげにヴァイオリンを弾いている。男の子はふと、そのドアを開けて中に入ると、煙くさい薄暗いバーの中でだんだんと踊りが始まる。男女が次々に踊り始めてその踊りは徐々に激しくなっていく。

大勢の人々の手拍子や笑い声にあふれたその時、年老いたユダヤ人の男が突然机を叩いて立ち上がり、馬鹿騒ぎをしている時か!と言わんばかりにその踊りを遮ってしまう。そして男の子はまたドアの外に出て悲しそうにヴァイオリンを弾き始める…

この逸話が目に浮かぶかのようである。中間部はオペレクのリズムがだんだんと動きを増し、頂点に達したところでその踊りをユニゾンで遮り、容赦ない中断はまるで叫びのような痛々しい響きに聞こえる。

#### 4つのマズルカ 作品24

1834-35年作曲 36年出版。デルフィーナ・ポツカの知人、ドウ・ペルトウイ伯爵に献呈。

#### 第14番 ト短調 Op.24-1

ゆったりとしたテンポの典型的なクァヴィアク。始まりの2小節はポーランドの民謡からの引用。またツィガース風の音階(6から7小節目)も特徴的。この曲について「農民の嘆き」という通称を聞いたことがあるがそのイメージに合っている。中間部は対照的な明るいマズルになっている。



#### 第15番 八長調 Op.24-2

軽やかなオベレク。中間部以外はすべて白鍵のみで弾かれる。繊細でコケティッシュでユーモアな踊り。中間部は生き生きとしたオベレクで始まり、突然変ニ長調が現れサロニックになる。16小節の長いコードは曖昧な感じが素敵で不思議な雰囲気。

#### 第16番 変イ長調 Op.24-3

ショパンが、気品あふれる作品に好んで用いた変イ長調で書かれている。優雅な中にcon animaと書かれている通り、軽やかなマズルのリズムが心地よい作品。だんだんと遠のいて消えるコードが夢見よう。

#### 第17番 変ロ短調 Op.24-4

作品24の中でも、形は違えど先の3曲に共通した「素朴さ」からは程遠い性格を持つ。まさにロマンティックなひとつの詩曲と言えるであろう。まず冒頭から右手での2つの旋律が次第に歩み寄り、独特な不協和音を作っている。常に右手は2つの声部で2小節ずつ上昇する形をとり、そのたびに調が移り変わっていく。どちらかというと、旋律のよりも和声的な作品で、それがより不安と動揺にかられるようなこの曲の雰囲気を作っている。中間部ではリディア調の色彩が強いユニゾンの後、4小節のモチーフが色彩や表現を変えながら8回繰り返される。何か大切なことを伝えても伝えても言い足りず、しどろもどろは絶叫するかのような激しさに至る。この曲で特に感動的なのはコードであろう。力尽き、疲れ果てたコードは、虚ろな中に希望が見え隠れしながら消えていく。

#### 4つのマズルカ 作品30

1836-37作曲 37年出版。チャルトリスキ公爵の妹マリア・ヴィルテンベルク公妃に献呈。

この作品が書かれる前に、理想の女性だったマリア・ヴォジンスカとの婚約が破綻しているが、そのためか、不安な情緒や動揺が見られる作品集。従来のおきまりの典型的なマズルカの形

から逸脱しようとしている「新しさ」が随所に見られる。それだけでなく、民族的な精神はより強くなっているところが素晴らしい。

#### 第18番 八短調 Op.30-1

はじめの4小節は、いかにも素朴な民謡の雰囲気ではじまるが、次なる4小節はfで奏され、突如不安にかられて動揺するかのようである。悲しみをたたえたクヴァイク。中間部に東の間、光が差したかのような、はかないマズルが現れる。

#### 第19番 口短調 Op.30-2

テーマのクヴァイクはpとfで2小節ずつ交代に奏でられ、会話での激しいやりとりを思わせる。第2のテーマは対照的に、長いフレーズでオベレクのリズムが複雑に和声を変えながら上昇する。速いテンポの中で、これだけ細かく密な和声の変化を作り出す手法は驚きで、悲しみと緊張感にあふれたオベレクになっている。口短調の作品ながら作品は嬰ハ短調で終えているとところが印象的。

#### 第20番 変ニ長調 Op.30-3

勇敢で堂々と呼び響くような冒頭の後、英雄的なマズルが始まる。3度で弾かれるテーマはfとppで、また長調と短調でエコーのようにコントラストをもって繰り返される。中間部はめまぐるしく転調を伴い、気分が不安定で動揺している。

#### 第21番 嬰ハ短調 Op.30-4

不安な情緒を持つ詩的なマズルカ。テーマはクヴァイクだが左手の広いアルペジオの和声に支えられ幻想的な雰囲気。

#### 4つのマズルカ 作品33

1837-38年作曲 38年出版。モストフスキ大臣の妹、ルジャ伯爵夫人に献呈。

全体的には、先の作品30のような創作の上での「新しい試み」は見られず、どちらかというと従来に近いが、どの作品も対照的な独自世界を持つ。

#### 第22番 嬰ト短調 Op.33-1

悲しいウヤヴィアク。冒頭のカデンツは始まりというより、何かが終わったような印象を受ける。現にその冒頭部分がこの曲の最後に現れる。このカデンツは婚約者マリア・ヴォジンスカへの別れを告げているのだろうか？

#### 第23番 二長調 Op.33-2

マズルカの舞踊そのものを表したような陽気で魅力的な作品。8小節によるオアレクが12回繰り返される。転調を伴う中間部を経て踊りが再現し、遠のいていくようなコードでは田舎の風景や民族舞踊が目に見えようである。

#### 第24番 ハ長調 Op.33-3

ショパンによって書かれた冒頭のSempliceがそのまま響きに表現されたような作品。ささやかで控えめなハ長調で始まり、中間部のゆったりと広がりを持つ変イ長調、そしていとも自然にまたハ長調に移り変わる様子が印象的。

#### 第25番 口短調 Op.33-4

素朴でどこか儂いウヤヴィアクのテーマと対照的な様々なエピソードが繰り返される大規模な作品。中間部では長調で豊かに歌われ、続いて鋭いマズルのリズムで飛び跳ねるおどけたエピソードが現れる。その後、ひとりて踊るような左手のみで奏されるppのメロディーから自然にテーマの再現に移る。

#### 4つのマズルカ 作品41

1838-39年作曲 40年出版。作家ステファン・ヴィトヴィツキ氏に献呈。

楽譜によって順番が異なる場合があり、自筆譜ではホ短調、ロ長調、変イ長調、嬰ハ短調の順に書かれているため、ここではそれに従っている。

#### 第26番 ホ短調 Op.41-1

マヨルカ島で書かれた作品で、バルマのマズルカとも呼ばれる。遠い祖国ポーランドの情景をやるせない思いで思い浮かべてい

るような哀愁に満ちたウヤヴィアク。

#### 第27番 口長調 Op.41-2

軽やかに速いオアレクで始まり、何かいたずらをたくらんでいるような楽しい曲。冒頭の4回繰り返される単純なモチーフは“足拍子”そのもの。中間部はマズルのリズムで足を踏み鳴らして得意げに踊る情景が目に見えよう。踊りが遠ざかるかのように曲が終わる。

#### 第28番 変イ長調 Op.41-3

どちらかというと田舎の民族舞踊というより、洗練されたサロン風。上品なオアレクと17小節目からのウヤヴィアクでは、途中から不意に寂しさに包まれるような雰囲気になる。メロディーの途中で途切れるような、この曲の終わり方が印象的。

#### 第29番 嬰ハ短調 Op.41-4

雰囲気や色彩の変化に富む大変幻想的でドラマティックな作品。フリジア旋法（第2音を半音下げた自然短音階）による陰鬱に始まるマズルの足りは次第に動きを増して激しくなり、力強く喜びに満ちたオアレク風となる。隣り合わせた音域を何度も行き来する（F♯、G♯、A♯）方法は民族楽器で演奏される特徴のひとつ。クライマックスは冒頭のテーマが両手のオクターヴで巨大に奏でられ、強烈な印象を与えている。コードは激しさの後の疲れと落胆、運命を受け入れなければいけない宿命のような悲しみの中に埋もれてしまう。

#### 3つのマズルカ 作品50

1841-42年作曲 42年出版。ハリへの亡命者、レオン・シュミトコフスキ将校に献呈。

この年にはこの作品集から始まり、ノバードの4番やスケルツォ4番、英雄ポロネーズなどが生まれ、実に充実した時期となった。

#### 第30番 ト長調 Op.50-1

生き生きと、陽気なマズルのリズム。1小節目からは、ふと左手に現れる叙情的なエピソードの転調の移り変わりが美しく、小さ

な幻想の世界を作っている。

#### 第31番 変イ長調 Op.50-2

気品あふれる優美なクワイアク。ここでもショパンお好みの変イ長調で書かれている。中間部のリズムカルなマズルとの対比が美しい。

#### 第32番 嬰ハ短調 Op.50-3

身にしみるような靈感に満ちた、大変独創的な作品。これほどまでに精巧にポリフォニーを用い、構成の面でも大規模なマズルカは今までにはなく、ノヴァー的な、または幻想マズルカとも言いたい傑作で、ポーランドの魂に満ちている。始まりのメロディーをポーランド人は“羊飼いの笛”の響きと言う。はりさけそうな郷愁の思いで書かれたであろうこの心打たれるエピソードはショパンが涙しながら書いたに違いない。続いて足踏みを鳴らして力強く踊りだすようなリズムカルなマズルは、誇りと強い意志が込められている。中間部には楽しいオペレクと豊かな歌が現れ、幸せな過ぎし日に思いを馳せているようだが、それも束の間、現実実に振り返られる。最も感動的なコーダは、劇的で半音階や対位法を駆使して見事なクライマックスを作っている。177小節目の悲痛な絶叫のような和音の後、疲れ果て、絶望的な終止に入る。

#### 3つのマズルカ 作品56

1843-44年作曲 44年出版。イギリス人の弟子キャサリン・マーバリー嬢に献呈。

#### 第33番 口長調 Op.56-1

さわやかな、農村の朝の光のような素朴なテーマは、曲中でロンド風に3回繰り返される。16小節目からの典型的なマズルの踊り、そして情景が一新する転調の後、23小節目から軽やかな小鳥が舞うようなオペレクが始まる。

#### 第34番 ハ長調 Op.56-2

少年時代の楽しい田舎の思い出に微笑みながら書かれたであ

ろう、若々しく底抜けに明るいマズル。ショパンのこの頃の作品番号の中では珍しいキャラクターの作品。ユーモアいっぱい、掛け声と足踏みを鳴らして元気に飛び跳ねる様子が目に浮かぶ。左手の空虛5度の響きにのせてメロディーが自在に動き独特の雰囲気を作っている。53小節目からはリディア旋法の両手のカノンがバグパイプのような響きを醸し出し、不思議な、思わず微笑んでしまう楽しさがある。マゾフシェ地方の農村の活気が息づいている真正正銘のフォークロール。

#### 第35番 ハ短調 Op.56-3

マズルカの中でも最高傑作のひとつである。幻想的な作品。4声のテーマは神秘的で悲しい詩の連のように繰り返し語られる。49小節目からの中間部は一転して広がりを見せ、変化に富み、マズルの生き生きとした踊りも現れるが、それも断片的ですぐに雰囲気が移ろってしまう。例えば89小節目のような、突然押し寄せる悲しみや、106小節目からの滴る涙のようなフレーズ。そしてまた楽しいマズルが再現されたかと思うと134小節目で無残にも断ち切れ、絶望の叫びと共に現実に戻り戻される…。コーダは、まどろむような響きで書かれ、まるで印象派のようである。絶望の中にもわずかな光を求めてか、少しずつ明るみが増し、消えうせながらも最後はハ長調で終わる。

#### 3つのマズルカ 作品59

1845年作曲 45年出版。献呈はなし。

#### 第36番 イ短調 Op.59-1

素材で、はかないクワイアク。柔らかな光が差したり陰ったりするかのような、転調の移り変わりが美しいテーマと2小節ずつさらに転調を重ねる展開が移り気な雰囲気を出している。中間部の半音階的な動きとポリフォニー、豊かな和声は創作の黄金時代を迎えたショパンの珠玉の作品。

#### 第37番 変イ長調 Op.59-2

晴れやかな、またしても気品溢れる変イ長調で書かれている。

優美にたゆとうような旋律は徐々に活気を増し、本格的なマズルとなる。コードでは思いがけない和声も現れユニーク。

#### 第38番 嬰へ短調 Op.59-3

力強く情熱的、また不安や葛藤をたずさえたマズルカ。リディア旋法のテーマは、始まりの大きな動きの後、同じ形を執拗に繰り返して下降していく。オペレクのリズムで何度も繰り返されるこの形も、単調になることなく、その都度色彩を変え、なんと豊かな表情に変化していることだろう。中間部はより幻想的で、オペレクのリズムによって半音階的な音形も多く現れる。特にテーマの再現の後、115小節目からは複雑な和声が入り交じり、悲劇的に“痛みを伴う半音階”が心をえぐられるような悲しみそのものに聞こえる。マズルカの中でも大曲で最高傑作のひとつ。

#### 3つのマズルカ 作品63

1846年作曲 47年出版、ショパン家とワルシャワ時代からの知り合い、ラウラ・チョスノフスカ伯爵夫人に献呈。

#### 第39番 口長調 Op.63-1

大きな動作で力強く踊る典型的な陽気なマズルで始まり、33小節目からは揺り動くようなpとおどけたfのオペレクになる。楽しいマズルカには、時に何かをたくらんでいるような、ユーモアたっぷりの悪ふざけを踊りの中で表現したりすることがあるが、53小節目からは転調を重ねて上昇し、男女のふざけた会話のような、ユニークなエピソードとなっている。

#### 第40番 へ短調 Op.63-2

叙情的で、心を打たれるような思慮深さに満ちたクヴァヴィアク。控えめながら、限りなく高貴でこの小さなマズルカに、ショパンならではの内なる美がまつまっている。13小節目から16小節の半音階の扱いは、リディア旋法の響きできめ細やかな、またどこか侘しさも感じられる。変イ長調の中間部は左手の5度に支えられた豊かなポリフォニーが素晴らしい。

#### 第41番 嬰ハ短調 Op.63-3

遠い祖国ポーランドを思い、涙が溢れるような哀愁のクヴァヴィアク。心に語りかけるような右手のメロディーがはかなく、美しい。一度聴いたら忘れられないほど印象的なこのメロディーが、再現の後コードで上部2声のカノンとなり、さらに表現の深さと心に迫る緊張感を与えている。

#### 第42番 イ短調 “A Emile Gaillard”

1839年-41年 41年出版。生徒であったエミール・ガイヤールに献呈。

チェロで、高音のメロディーを表情豊かに奏でたような左手のテーマが美しいクヴァヴィアク。中間部はイ長調で晴れやかになり、オクターヴで豊かに流れるオペレクとなる。

#### 第43番 イ短調 “Notre temps”

1840-41年作曲 42年出版。献呈はなし。

ドイツの出版社シュットの依頼により作曲された。当時、ツェルニーやメンデルスゾーン、カルクブレナーなどの作品を集めて最新のピアノ曲を集めたアルバム“ノートル・タン”にこの作品が入れられた。

愛いに満ちたクヴァヴィアク。中間部は長調となり、わずかに光が差すが、両手のユニゾンがはかないメロディーを奏でる。この曲には個人的にシュベルトのような佇まいを感じる。

#### 4つのマズルカ 作品67 (遺作)

第1曲は1829年から30年にかけて、第2曲は1848年から49年にかけて、第3曲は1835年に、第4曲は1846年にそれぞれ作曲された。献呈はなし。

#### 第44番 卜長調 Op.67-1

若々しい男女のエネルギイ溢れるマズルの踊り。29小節目からのスケルツァンドは足踏みや跳躍など、いかにも楽しい音が聞

こそうなほどの楽しさである。

#### 第45番 短調 Op.67-2

悲しみを胸にしまい込み、穏やかに佇む、はかないクヤヴィアク。  
17小節目からの中間部のわずかな明るさもすぐにその後の半音階に消されるような、ショパンの晩年の心情がうかがえる。

#### 第46番 八長調 Op.67-3

素朴な民謡のようなテーマのメロディーが変奏を伴いながら何度も繰り返される。わずかな8小節の中間部を除いてずっとこの旋律が流れる。慈愛に満ちた作品。

#### 第47番 短調 Op.67-4

Moderato animato とあるように、メランコリックな中にも濃とした意志の強さを秘めたクヤヴィアク。私の全く個人的な勝手な印象だが、私はこの曲を「別れのマズルカ」と感じている。祖国や愛する人に対する告別をひひしと受け止めなければいけない、そんな心情だろうか。

### 4つのマズルカ 作品68 (遺作)

第1曲と第3曲は1829年から30年、第2曲は1827年。第4曲は1849年にスケッチのみを残して未完成のまま生涯を終える。献呈はなし。

#### 第48番 八長調 Op.68-1

スカートを翻しながら、自由自在に踊る華やかなオベレクの舞。21小節目からは力強いマズルも見られる。

#### 第49番 短調 Op.68-2

リディア旋法の第4音を半音上げる方法が、1小節目の3拍目でアクセントとトリルで強調され、そのため独特の幻想的な空気が流れている。左手との不協和音が作り出す、どこか陰鬱で暖味なキャラクターがこの曲を支配して、短調と長調を交代させながら独特なクヤヴィアクとなっている。

#### 第50番 八長調 Op.68-3

素朴で典型的なマズル。フォークロールでお決まりのパターン

である3部形式で中間部は空虚5度に民族楽器の弦楽器で奏するリディア旋法の旋律が、伝統の踊りそのものである。

#### 第51番 短調 Op.68-4

ショパンの絶筆の作品。この曲を書き終えることなくショパンが亡くなった為、遺されたこの曲のスケッチも読み取りにくく、完成するのに大きな問題があったとされている。典型的なクヤヴィアクだが、全体が半音階的で、そこから生まれるこの曲の佇まいは死を目前にしたショパンの息苦しさ、時にもうろうとした中で一瞬の希望なども垣間見られる。痛々しいエレジーとも言える作品。未完成のまま、ショパンが静かに息をひきとったかのように曲の途中で私は演奏を終えている。恩師バルバラ・ヘッセ・ブコフスカによる伝授である。

#### 第52番 変口長調

1826年作曲 26年出版。献呈はなし。

陽気なマズルと高音で奏でられる中間部との対比が美しい。

#### 第53番 長調

1826年作曲 26年出版。献呈はなし。

活気に満ちたクヤヴィアクの踊り。同じリズムが繰り返されるのは典型的なフォークロール。中間部は純粋な八長調のクヤヴィアク。

#### 第55番 二長調 (遺作)

1832年作曲 80年出版。献呈はなし。

序章の後、明るいマズルが始まる。45小節目からは、ひとつのペアのソロの踊りのよう。

#### 第56番 変口長調 (遺作)

1832年作曲 1909年出版。アレクサンドラ・ヴォヴォフスカ嬢に献呈。

民族楽器の前奏に誘われて踊り出すかのような楽しい作品。

### 第57番 ハ長調 (遺作)

1833年作曲 69年出版。献呈はなし。

誇り高き、勇壮なマズル。

### 第58番 変イ長調 (遺作)

1834年作曲 1930年出版。献呈はなし。

数人の女の子が踊るささやかなオペレク。軽やかな足取りで手を振りながら舞台を一人、また一人と去っていくように終わる。

(えざき・まさこ)

## 江崎 昌子

桐朋学園大学を卒業後、ポーランド・ワルシャワ・ショパン・アカデミー研究科修了。

95年第6回ミロシ・マギン国際ピアノコンクール第1位(フランス)、97年第4回シマノフスキ国際ピアノコンクール第1位及び最優秀シマノフスキ演奏賞(ポーランド)、98年第21回サレレノ国際ピアノコンクール第1位及び最優秀ドビュッシー演奏賞(イタリア)、04年度、第31回日本ショパン協会賞受賞。ポーランド各地のオーケストラとの共演や、モスクワ放送響、チェコフィル、東京交響楽団、日本フィルなどと共演。現在、洗足学園大学で講師として後進の指導にもあたり、各地でレクチャーコンサートも数多く行っている。これまでに熊谷洋、北村陽子、タチアナ・シェバノワ、ジャン・エフラム・バブゼ、バルバラ・ヘッセ・プロフスカ、セルゲイ・エデルマンの各氏に師事。

江崎昌子のホームページ <http://www.masakoezaki.com>

表紙裏の写真: ショパンの生地、マノフシ地方、ジェラノバ・ヴォーラ

### □ ディスコグラフィ □



#### ショパン:エチュード全集

作品10、作品25、3つの新編習曲

[CD&SACD]OVCT-00020 ¥3,000(税込)

<録音:2004年11月29、30日、12月1、2日 山形テラス>



#### ミロシ・マギン

「子供のロンド」

[CD]OVCL-00029 ¥2,800(税込)

<録音:2000年7月12日 高山、北アルプス文化センター>



#### メモリーズ

ショパン/シマノフスキ/マギン/モニューシコ

[CD]OVCL-00013 ¥2,800(税込)

<録音:1999年10月12、13日、11月2日 山梨・身延町総合文化会館>



## SACD<Super Audio CD>について



SUPER AUDIO CD

SACDはCDの開発者であるソニーとフィリップスによって共同開発された新世代のオーディオディスクです。音楽の感動を余すことなく伝えるために録音周波数帯域を100kHz近くまで拡張し、ダイナミックレンジもまた120dB以上(可聴帯域内)と大幅に拡がっているため、自然界に存在する音のほとんど全てを捉えることが可能となりました。SACDでは、従来のPCM方式とは異なったDSD(Direct Stream Digital)と呼ばれる信号記録方式が採用されており、音楽信号のほとんど全てはもちろんのこと、演奏会場の空気感までも忠実かつ高い鮮度で再現することが可能です。

## DSD<Direct Stream Digital>について

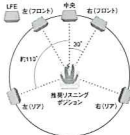
DSD

Direct Stream Digital

DSD方式では、アナログ音楽信号をデルタタム変調器で高速の1ビットのデジタル信号に変換し、この膨大な数の1ビット信号をそのまま記録します。つまり従来のCDなどに用いられるPCM方式の64ビットの級から信号の波を、パルスの疎密波として記録していく方法です。それは、あまたも空気の疎密波である音楽信号波形をそのまま写し取ったような記録方法ともいえるでしょう。このアナログ信号に近いデジタル記録方式が音楽の空気感までも伝えることができる秘密なのです。

## SACD<Super Audio CD>マルチチャンネル Multi-ch について

SACDマルチチャンネルは、マルチチャンネルに対応したスーパーオーディオCDプレーヤーと複数のチャンネル出力を持つパワーアンプ、複数のスピーカーシステムという構成で再生を行います。このスピーカーの配置は、前方3チャンネル、後方2チャンネルの5チャンネルを基本としています(左図参照)。残る1チャンネルはLFE(低音域専用チャンネル)として用意されています。LFEスピーカーは、音の定位に関しては無指向である低音域を受け持つため、その配置についてはとくに規定はされていません。部屋の条件に合わせて自由に設置することが可能です。



## EXTON STUDIO



本ディスクは、数々のSACD、DVD-Audioを手がけてきたオクタヴィア・レコードが考える理想の制作環境を形にした「EXTON Studio」で制作され、最良の音質及び音場感をお楽しみ頂けるものとなっています。

### EXTON Studioの特徴

- サラウンドMIXでは定番モニターのGENELEC 1031Aを壁に埋め込んだ形で用いた、八角構造のスタジオで、マルチ・サラウンドに特化した音響特性を持つ制作環境。
- メインのPyramid SystemによるDSD16ch, PCM24ch(96kHz/24bit)の編集、ミキシング、マスタリングに対応したハイエンド・フルデジタル環境。
- 近年、欧州全域のスタジオ施工技術において高い評価を持つMediatronik社の設計によるスタジオデザインで、その素材の全てを欧州より直輸入。

● and DSD are Trademarks.

● DSDの音はSACD対応プレーヤーでお楽しみください。尚、本品はCDレイヤーをあわせ持った二層構造の「ハイブリッド・ディスク」になっておりますので、通常のCDプレーヤーの多くのもでもCD品質の音でお楽しみいただくことができます。また、DVDプレーヤーの場合は、CD対応とされている機種でもからないものがありますので、あらかじめ御了承ください。詳しい再生上の取り扱い方については、ご使用になるプレーヤーなどの取り扱い説明書をご覧ください。

<取り扱い上のご注意> ●ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等をつけないように取り扱ってください。●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取って下さい。レコード用クリーナーや油剤等は使用しないで下さい。●ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。●ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。<保管上のご注意> ●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。●ご使用后、ディスクは必ずプレーヤーから取り出し、専用ケースに入れて保管して下さい。●ディスクケースの上に重い物を置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。





Recording Date: 28-30 Mar. 2006  
Recording Location: Northern Alpine Culture Center, Toyama  
Mixed and Mastered at EXTON studio, Yokohama

Producer: Tomoyoshi Ezaki  
Assistant Producer: Masako Teshima  
Recording Director: Tomoyoshi Ezaki  
Assistant Director: Masako Teshima  
Balance Engineer: Tomoyoshi Ezaki  
Assistant Engineer: Masato Takemura  
Editor: Tomoyoshi Ezaki  
Piano Tuner: Toshiya Hironaka  
A&R: Masako Teshima  
Photographer: Yukio Kojima (Cover)  
Cover Design: Hanako Tokuda



OVCT-00035



ショパン  
FRÉDÉRIC FRANÇOIS CHOPIN (1810-1849)

## DISC 1

マズルカ集 I  
Mazurkas I

- 1-4 4つのマズルカ 作品6  
4 Mazurkas Op.6  
Nos.1 - 4
- 5-9 5つのマズルカ 作品7  
5 Mazurkas Op.7  
Nos.5 - 9
- 10-13 4つのマズルカ 作品17  
4 Mazurkas Op.17  
Nos.10 - 13
- 14-17 4つのマズルカ 作品24  
4 Mazurkas Op.24  
Nos.14 - 17
- 18-21 4つのマズルカ 作品30  
4 Mazurkas Op.30  
Nos.18 - 21
- 22-25 4つのマズルカ 作品33  
4 Mazurkas Op.33  
Nos.22 - 25
- 26-29 4つのマズルカ 作品41  
4 Mazurkas Op.41  
Nos.26 - 29

## DISC 2

マズルカ集 II  
Mazurkas II

- 1-3 3つのマズルカ 作品50  
3 Mazurkas Op.50  
Nos.30 - 32
- 4-6 3つのマズルカ 作品56  
3 Mazurkas Op.56  
Nos.33 - 35
- 7-9 3つのマズルカ 作品59  
3 Mazurkas Op.59  
Nos.36 - 38
- 10-12 3つのマズルカ 作品63  
3 Mazurkas Op.63  
Nos.39 - 41
- 13 第42番 イ短調  
No.42 in A minor "A Emile Gaillard"
- 14 第43番 イ短調  
No.43 in A minor "Notre temps No.2"
- 15-18 4つのマズルカ 作品67 (遺作)  
4 Mazurkas Op.67 (Op.posth.)  
Nos.44 - 47
- 19-22 4つのマズルカ 作品68 (遺作)  
4 Mazurkas Op.68 (Op.posth.)  
Nos.48 - 51

- 23 第52番 変ロ長調  
No.52 in B-flat major
- 24 第53番 ト長調  
No.53 in G major
- 25 第55番 二長調 (遺作)  
No.55 in D major (Op.posth.)
- 26 第56番 変ロ長調 (遺作)  
No.56 in B-flat major (Op.posth.)
- 27 第57番 八長調 (遺作)  
No.57 in C major (Op.posth.)
- 28 第58番 変イ長調 (遺作)  
No.58 in A-flat major (Op.posth.)

江崎 昌子 (ピアノ)  
MASAKO EZAKI (piano)

2006年3月28-30日 富山・北アルプス文化センターにて収録  
Recording Date : 28-30 Mar. 2006  
Recording Location : Northern Alpine Culture Center, Toyama  
Mixed and Mastered at EXTON Studio, Yokohama  
TOTAL TIME : DISC 1 75:59 DISC 2 72:33

©©2006 Octavia Records Inc.

Made by Octavia Records Inc., Japan. Unauthorized reproduction prohibited.



C D

SACD STEREO

SACD 5ch SURROUND

OVCT-00035

Stereo Multi-ch

DDD

DSD  
RECORDING

このディスクは、一定期間貸与非許諾商品ですが、この期間経過後も、権利者の許諾なく貸賃業に使用すること、ネットワーク等を通じてこのディスクに収録された音を送信できる状態にすることを禁じます。また、個人的に楽しむなどの場合を除き、著作権法上、無断複製は禁じられています。

06-7-26 © © 08.7.25まで